書　評

徳永誓子著『憑霊信仰と日本中世社会』

小山　聡子
（二松学舎大学）

本書は、修験道史研究で知られる徳永誓子氏の単著である。近年、氏は、精力的に憑霊信仰に関する論考を世に送り出してきた。本書には、約二〇年前から近年に至るまでの氏の研究成果が凝縮されている。とりわけ宗教史研究者にとっては、まさに待望の一書だと言うことができるだろう。

歴史学の面からの憑霊信仰に関する研究は、一〇年ほど前から盛んに行われてきた。史料に基づき論じられてきたことにより、憑霊信仰の有り様がようやく浮き彫りになりつつあるところである。そのような中、本書は、先行研究を踏まえた上で、新たな論を展開するべく、上梓された。

まず、本書の構成と内容を簡単に見ていきたい。

「序章」では、憑霊信仰に関わるこれまでの研究を整理した上で、その問題点を指摘し、本書の構成が述べられている。

「第一章 古代・中世の験者」は、徳永「修験道成立の史的前提－験者の展開」（『史林』八四－一、二〇〇一年）をもとにしている。徳永氏によってこの論文が発表される以前には、「験者」とは修験者を指す語である、とする認識が一般的であった。それに対して氏は、「験者」という語は、一〇世紀半ばから加持治療などの治療を行う僧を指すことを明らかにし、大いに注目された。徳永氏は、一一世紀後半以降はヨリマシ加持を行う者も指すようになり、さらに一二世紀以降にはヨリマシ加持を行う者に限定されていったことを指摘している。また、験者と修験道の関わりに関しても考察されている。

「第二章 護法童子考」では、護法童子の成立は一一世紀前半まで遡らせることができると指摘し、一一世紀半ば成立の『法華験記』で持経者に使役される童子は、すでにヨリマシ加持によって定着した僧に従属する童子の尊格を、敷衍したものであると捉える。

「第三章 梓弓と鼓」では、民間ミコが行った、自身に霊を憑ける技法について整理し、彼らの行う託宣とヨリマシ加持との接近について論じている。

「第四章 ヨリマシと験者」では、職業的・半職業的ヨリマシについて、験者による随伴の有無やヨリマシ加持における双六盤・囲碁盤利用に関する検討が、推論も含めてなされている。ここでは、ヨリマシ加持における遊戯盤は験者によって取り入れられ、上皇や天皇の周辺ではミコがヨリマシに用いられた明確な例は一四世紀初頭まで下る、とする結論を述べている。

「第五章 諸天・神祇と念仏」では、第四章までの内容とは少々隔たりがあり、クリーブランド本『融通念仏縁起』を対象に、専修念仏からの影響を論じている。

「第六章 騎牛の疫神」では、第五章に続き、『融通念仏縁起』を扱っている。ここでは、知恩院本とフリーア本に描かれる騎牛の疫神の背景に関して論じており、推測にとどまることを断った上で、疫神により病死した貴人などが疫神となった姿ではないかとする見解を示している。第五章と第六章については、徳永氏が本書「あとがき」で「補論のような扱いになった」としているように、書名にある「憑霊信仰」に関連はするものの、直接的に論じる内容とはなっておらず、若干の違和感を禁じ得ない。

「終章」では、本書の成果が簡潔にまとめられた上で、今後の展望も示されている。

本書では、全体にわたって、とりわけここ一〇年ほどの先行研究の成果と問題点が詳細にまとめられている。この点は非常に有益である。また、これまでの諸説の修正が満遍なくほどこされていることも特筆すべき点であろう。徳永氏による修正には適切なものが非常に多く、今後の憑霊信仰に関する研究に寄与するところが甚だ大きいと考えられる。

拙稿・拙著に関しても、多くの妥当な指摘がなされている。たとえば、かつて拙稿「囲碁・雙六によるモノノケの調伏」（『説話文学研究』五一、二〇一六年）で、囲碁を打つことにより瘧鬼を調伏した事例について、モノノケを落とした事例として論じたが、瘧鬼とモノノケは古代中世の人間にとって同一ではなく、明確に区別されるものであった。徳永氏はその点も的確に指摘している。

また、拙著『護法童子信仰の研究』（自照社出版、二〇〇三年）で、童子形の護法は一二世紀に現われたとしたが、後に拙稿「平安時代におけるモノノケの表象と治病」（小山聡子編『前近代日本の病気治療と呪術』思文閣出版、二〇二〇年）で一一世紀前半の『紫式部集』に出てくる「小

法師」を護法童子であるとし、護法童子理解を修正した。拙稿では自身が護法童子理解を修正したことを明記してはいないが、その点も本書では指摘されている。

さらに、かつて拙著『親鸞の信仰と呪術』（吉川弘文館、二〇一三年）で、ヨリマシの体内に入った護法がその口を借りて語った事例として『長谷寺験記』を挙げた。しかし、この事例は、徳永氏が指摘するように、ヨリマシ加持の事例ではないので、ヨリマシ加持における護法と同一に捉えることは必ずしもできない。ただし、護法が人の口を借りて言葉を発した事例ではあるので、今後、さらに検討を加える必要があるだろう。

このように、徳永氏は、拙稿・拙著を含め、先行研究の細かな点まで数多くの指摘をし、修正を加えている。この一〇年間で進展した憑霊信仰に関わる研究が、徳永氏の研究により、精度が増したと言えるだろう。

ただし、徳永氏による指摘や論の全てが妥当であると考えるわけではない。たとえば、かつて、拙著『護法童子信仰の成立』において、護法童子信仰成立の要因を末法思想に求め、穢土である此岸で僧に近侍する者として穢れの有無に左右されない童子がふさわしかった、とした。そのことについて本書七八・七九頁では、天部尊格の系譜の下位に位置づけられる護法は、此岸から切り離された存在ではなく、穢れを忌むものとは見なせない、としている。しかし、そうであろうか。護法は常に此岸にいる存在ではないのではないか。やはり護法童子信仰の成立に関しては童子信仰の高まりの中で検討するべきであると考える。

また、『不動使者陀羅尼秘密法』などの漢訳経典に記される「矜羯羅」と「制吒迦」が童子として明記されていることが、不動明王二童子や護法童子信仰に影響を与えたとする小田悦代氏の指摘（小田悦代『呪縛・護法・阿尾奢法』岩田書院、二〇一六年）に従いたい、としている。護法童子信仰成立には複合的な理由があるのであって、当然のことながら不動明王関連の経典の影響は大きいであろうし、不動明王二童子の使役法も大いに関係しているだろう。護法童子信仰の成立については、『護法童子信仰の研究』での見解を修正し、法華経信仰の童子よりも、むしろ不動明王二童子の影響の方が強かったであろうことは、拙稿「護法童子信仰の成立と不動信仰」（磯水絵編『論集 文学と音楽史』和泉書院、二〇一三年）で論じている。しかし本書では、拙稿「護法童子信仰の成立と不動信仰」については触れられず、約二〇年前の拙著『護法童子信仰』のみが引用されている。研究は進展していくものなので、二〇一三年に発表した拙稿も確認した上で論じてほしかった。

さらに、本書では、根拠が薄弱ではないかと考えられる批判もなされているように考える。たとえば第四章「ヨリマシと験者」では、ミコが双六盤や囲碁盤を用いてヨリマシ加持が行われていたことについて論じられている。後白河法皇が制作させたと考えられる絵巻物『餓鬼草紙』には、出産が行われた室の隣の間で無事の出産を喜ぶ僧とヨリマシの女性が描かれている。ヨリマシの後方には、ヨリマシ加持に用いたと考えられる双六盤が描かれている。この場面について、本書では、生まれたての赤子を食おうと手を伸ばす餓鬼の姿に注目し、「双六盤を不首尾に終わった治療の象徴」と見なしている。それによって本書では、病気治療に遊戯盤を導入したのが後白河であるのならば、自身が関わった絵巻物にこのような場面を描かせないだろう、としている。しかし、この絵のみからそこまで言えるだろうか。双六盤を用いてモノノケ調伏をしたことにより赤子は無事に産まれたのである。双六盤には効果があったと見なすべきだろう。『餓鬼草紙』は餓鬼についての絵巻物なのであるから、餓鬼が赤子を食べようとする様子が描かれるのは当然である。むしろ、このような絵が描かれたことは、すでに『餓鬼草紙』が描かれた一二世紀後半には、モノノケの調伏に双六盤を使うのは当たり前だったことを示しており、その点にこそ着目すべきなのではないだろうか。

本書では、『今鏡』の真言僧深覚の話が、遊戯盤による治療を語ったものとして最も古いことを理由に、遊戯盤のヨリマシ加持への導入は、深覚に連なる人物によってなされたのではないか、とされている。さらに、遊戯盤に関する記述が見えない事例についても「遊戯盤を打たせた可能性」を指摘するなどの推測を重ね、一二世紀後半までに真言の験者によって遊戯盤の技法がヨリマシ加持に導入され、この時期には天台宗では行っていなかった、とする推論を提示している。しかし、『餓鬼草紙』に双六盤が描かれたのは、それを見る人々が何をしていたのかを一目で理解できるようにするためであろう。実際のところ、出産時の験者の多くは天台僧であり、真言僧は稀であった。もし真言僧のみがヨリマシ加持に遊戯盤を用いたのであれば、出産時のヨリマシ加持に遊戯盤が使われること自体が稀であり、『餓鬼草紙』にこのように描かれることはなかったのではないだろうか。

さらに、本書では、ヨリマシ加持における遊戯盤の導入は、ヨリマシではなく、験者が導入した、とする見解も示されている。その理由として、遊戯盤の逸話にはミコやヨ

リマシが登場しないからだとされている。しかし、『今鏡』「みこたち第八」（源氏の御息所）には、天台僧の行尊が「物つきに物うたせてゐ給へりけるこそ、いとめでたく侍りけれ」とある。要するに、行尊はヨリマシ（物付）にただ「物」を打たせて座っているだけでモノノケを調伏できたことを賞賛されているのである。ここでいう「物」とはモノノケのことだろう。ヨリマシは、何かを打つ動作をしていたことになる。『餓鬼草紙』の絵を思い起こせば、ヨリマシが打っていたのは、囲碁盤、または双六盤だと解釈するのが自然ではないだろうか。その上、もしそうであるのならば、行尊は天台僧であるから、真言僧がヨリマシ加持に遊戯盤を導入したとする説も再考の余地がある。

本書は、二〇年以上前の論文から近年までの論文をもとに、それらを改稿した上で上梓された。ところが、その改稿には不十分と言わざるを得ない部分もあるように思う。たとえば、前述したとおり、第一章「古代・中世の験者」は、二〇年以上前に発表された論文を改稿して成っている。本論文が発表される以前には、史料や文学作品で病気治療や出産の折に書きとどめられる「験者」は、修験者だと解釈されてきた。本論文は、「験者」とは修験者ではなく、加持治療などの治療を行う僧であることを明らかにしたはなはだ画期的な論文であり、修験道史研究のみならず宗教史、歴史学の分野の研究者からも非常に高く評価された。それにもかかわらず、本書第一章の冒頭には次のようにある。

> 「験者」という言葉は、今日一般に、修験者と同義、もしくはその前身にあたる存在と見なされている。『日本国語大辞典』の「げん－ざ【験者】」の項にも「加持祈禱をして、物の怪などを退散させ、病気をなおして、霊験をあらわす行者。修験道の行者。修験者。修験。げんじゃ。」とある。

しかし、すでに徳永氏の研究を受けて『日本国語大辞典』の「験者」の項には以下の補注が付されているのである。

> 元来は「修験者」と同義であったが、修験者は、修験道において山林にこもって霊験を得ようとする修行者を指す場合が多いのに対し、験者は、霊験の力によって精神錯乱などの病気や、ものに憑かれた人を治療する人を指し、意味の使い分けが見られる。

つまり、「「験者」という言葉は、今日一般に、修験者と同義、もしくはその前身にあたる存在と見なされている」というのは、徳永氏の「修験道成立の史的前提－験者の展開」が発表された二〇〇一年の時点では妥当であるものの、現在においては妥当ではないのではないだろうか。たしかに、文学研究者の手による『紫式部日記』の注釈・現代語訳などでは、いまだに「験者」を修験者だと見なしているものも確認できるが、少なくとも歴史学の分野では、病気治療や出産の時に記録される「験者」が修験者ではないことは、いまや「常識」であると言って良い。言わずもがな、そのような「常識」が広まったのは、まさしく徳永氏の優れた研究によるものである。

すでに「験者」の認識が「常識」となって受け入れられている現在、新たな見解であるかのように記す必要はなかったのではないだろうか。本書の第一章の冒頭では、一気に二〇年前の研究状況に引き戻された感が拭えない。

以上、本書の構成と内容、成果、さらには若干の疑問点を記した。若干の疑問点を記しはしたものの、近年進展してきた憑霊信仰に関わる研究には、本書によって多くの的確かつ重要な修正が加えられた。本書によって、憑霊信仰の研究の精度が上がり、より具体的に明らかになった点が非常に多くある。本書は、今後、間違いなく、憑霊信仰に関する重要な研究書の一つとして位置付けられるだろう。

（法蔵館、2022年3月刊、A5版・278頁・定価3500円）